令和3年度せたがや学生ボランティアフォーラム

オープニング【せたがや学生ボランティアネットワーク会議参加団体】

せたがや学生ボランティアフォーラムを開催いたします。まず、本フォーラムのプログラムを紹介します。初めに、認定特定非営利活動法人 日本NPOセンター上田英司事務局次長から「学生によるボランティア活動」をテーマにした基調講演をいただきます。次に、「せたがや学生ボランティアネットワーク会議」を通じて実現した、子ども食堂の実現に向けた取り組みを紹介します。そして、「せたがや学生ボランティアネットワーク会議」に参加している学生ボランティア団体の活動を発表します。最後にパネルディスカッションを行います。テーマは「学生によるボランティア活動」です。ファシリテータは世田谷ボランティア協会の深山ゆみ様です。パネリストは、学生ボランティア団体の代表、7名と認定特定非営利活動法人 日本NPOセンター上田英司事務局次長です。本フォーラムを通じて、大学生によるボランティア活動を知っていただくとともに、地域での活動などの社会貢献に、皆様が取り組むきっかけとなり、「誰もが共に参加・活躍でき、人権が尊重され、安心・安全に暮らせる　多文化共生のまち　せたがや」の実現につながればと考えております。それでは、せたがや学生ボランティアフォーラムをお楽しみください。

基調講演【上田】

それでは皆さん、こんにちは。日本NPOセンターの事務局次長の上田と申します。今日は、学生ボランティアフォーラムについての活動、学生ボランティアについての活動についてお話をさせていただきたいと思います。資料を準備しておりますので、資料にそって、お話いたします。まず、簡単に、自己紹介となります。上田と申します。今はですね世田谷区の隣の、東京都の狛江市というところに住んでいます。この狛江市に引っ越したきっかけも、この後、お話をします。学生ボランティアからの繋がりから、今の狛江に繋がっているというところで非常に不思議なご縁を感じます。私自身はですね、島根県の出雲市に生まれました。そのあと大学進学のために、福岡県に引っ越しをして、学生生活を過ごしました。その時に、たまたま大学の授業の中で、学生ボランティアに関する取り組みが紹介されて、その中で、ぜひそういった活動に参加したいなというところからの学生ボランティアに参加して、今の仕事に繋がっているという状況になっています。今は、日本NPOセンターの事務局次長という立場もありますが、狛江市内でも、狛江市の市民活動支援セン

ターの運営委員長や、あとは地域活動として、PTA連合会だったり、あと今年からは、町会のですね、理事も務めさせていただくことになりました。これもですね、最初のきっかけをさかのぼっていくと、学生ボランティアだったなというふうに思っていて、今日皆さんと一緒にこういったお話をさせていただくことも非常にうれしく思っています。私自身の、活動を紹介させていただければと思いますが、先ほども話しましたように、学生の時にこの今紹介しているNPO法人NICEというところの、国際ボランティアに参加したのがきっかけでした。私は大学を選ぶ際に、もともとは国際協力の仕事をしたいというふうに思っていました。当時、高校の先生にですね、どういった国際協力の仕事ができるかというと、相談したときに、やはり技術やいろんな専門の知識を持っていないと、なかなか貢献できないんじゃないかというアドバイスをもらってですね、進学先は、土木の道にですね、することにしました。その中で、たまたま事業の中で、こういった国際ボランティア、市民のボランティア活動で、地域にも社会にも貢献できるんだということを、知ってですね、当時、大学一年生の時ですね、北海道の国際ボランティアに参加しました。この国際ワークキャンプってなに？というふうに書いてありますが、NICEが行っている国際ボランティアは、まず国際というのがついているんですけど、世界中からボランティアの人たちが集まってですね、この二つ目にワークという言葉書いてありますが、基本的には、ボランティア活動、地域の中で、地域が必要としているボランティア活動に取り組んでいこう。最後キャンプというのがありますが、キャンプというのは、みんなで一緒に共同生活をしながら、一緒に暮らしていくということが、活動の特徴になっています。当時大学一年生の時に、ボランティアプログラムに参加したときに、ベルギーや、イギリス、カナダ、韓国、日本、10名ぐらいのですね、学生を中心としたメンバーと一緒になってですね、共同生活をしながら、北海道のアイヌ民族の伝統を伝える森の再生プロジェクトという名称だったんですけど、もう20年以上前の活動ですか、プロジェクト名、今でも覚えていて、一緒に、10日間ですね、森に入って、森林の整備をしたということを行いました。そのときに、北海道で受け入れをされているNPOの方に、私が当時質問したんですね。この今、育てている、小さな苗木、植えて2、3年ぐらいだったんですけど、この苗木が育って、皆さんが理想とする森になるには何年ぐらいかかるんですかっていう質問したときに、その方がおっしゃったんですよね。この森が、自分たちの理想に近づくためには、60年、70年、80年、そんなぐらいの年月がかかるんだと。ここに書いてある言葉なんですけど、自分たちの、自分の孫たちの世代のために森を手入れしてるんだという話を聞いたときに、私はとてもびっ

くりして、本当にびっくりしました。自分自身は、いろんな形で海外に協力したいというふうに海外でいろんな国際協力活動に参加したいと思っていたんですけど、日本国内でもこんなに一生懸命自分たちの地域で、しかも、60年、70年、80年先のために活動しているんだという、そういうことを知ってですね。まずは、国際協力の前に、自分が住んでいる日本で何ができるんだろうということを、とても考えて、たまたまそのときに、このNICEという団体が、職員募集をしていたので、当時、まずそこに応募をしてですね、たまたま採用してくれて、今に至っているという形になります。それから、20年以上の国際ボランティアや、あとは、市民活動の業界で仕事をするきっかけになったよっていうのが、私自身の学生ボランティアのきっかけでした。今日はですね、学生のボランティア活動とはというところで、少しだけお話をさせてもらいたいと思いますが、こちらは、国立青少年教育振興機構さんが作られた、大学生のボランティア活動等に関する調査報告書というのがありまして、2020年3月にとられたものでして、実際に活動したことがありますかという問いに対して、回答がされています。一番下を見るとですね、実際にボランティア活動をしたことがあるよという人たちが、約4割弱ぐらいですね、実際に参加をされています。自主的に参加した人や、あとは、大学やゼミの一環で参加した人たち、あとは両方というところでありますが、4割の人たちが参加し、逆に言うと、6割の人たちは、こういったボランティア活動に、大学の学生時代に、参加したことがないというのがあります。今日のこのフォーラムの一つの趣旨としては、まずはボランティア活動に取り組んでいる人たちのネットワーキングというところもあると思いますが、そのネットワーキングから、次の一歩として、これまで、ボランティア活動に、あまり積極的に参加したことがない人たちにとっても、どうやって参加をしてもらえるか、そういったことを考えるというのが一つの趣旨だと思っています。では具体的にどんな活動や、取り組みをしていたかというところになりますが、やはり子どもたちの活動ですね、非常に多い割合になっています。あとはまちづくりの活動というのも、次に多くなっています。やはりこういったボランティア活動の中で、本当に多様な活動が、この中でも列挙されていますが、いろんな活動がありますので、ぜひ、自分の関心や、あとは大学で学んでいることの延長線、もしくは大学で学んでいないからこそ、全く違う分野で、取り組みをしたい、そういったこともあるかなと思います。私自身も、子どもたちの活動に、野外キャンプ体験活動をですね、2泊3日とか長い時は1週間以上のキャンプ等に参加したことありましたが、これはもう本当に、ボランティア活動の意義というところにもなりますが、子どもたちに何かをしてあげるみたいなも

のよりも、子どもたち自身が、1週間、野外でキャンプをしながら、自分たちで食事をしたり、山登りだとか川遊びしたりだとか、時には友達と喧嘩をしたりとか、いろんなことを経験して、成長していく姿を見て、我々自身が学ぶことも非常に多いなというふうに思います。また障害のある方のボランティア活動もありますが、やっぱりそういった自分とは違う立場の人たちの取り組みにかかるというのは、大きな発見があると思います。学生の時に、障害のある方のお出かけ支援というのも、経験したことがありましたが、そういったときに、この障害のある方の、実際に外出というのがどれだけ、社会的な整備が進んでいないかというのがわかるきっかけにもなったりもしました。ぜひ皆さん自身も、この後、各団体の取り組み紹介もあるかと思いますが、自分がどんな取り組みしたいかというのを考えながら聞いていただければというふうに思います。では、このボランティア活動がどんな意義を持っているかということも、少しだけ、話をさせてください。今回、三つの視点で、ボランティア活動の意義というのを書きました。まず一つ目、NPOや市民活動団体にとってということを挙げています。これはですね、皆さんが、ボランティア活動する時に、1人でボランティアをするっていうのはあまりないと思います。今日は、世田谷ボランティア協会さんも参加をされているかと思いますが、そういった団体さんが、こういったボランティア活動を行っている団体がありますよというようなことの情報提供を行ったりだとか、もしくはですね、具体的に、例えば子どもたちの学習支援をやっているNPOが自分たち自身でですね、ボランティア情報を発信して、ボランティアを求める、そういった、基本的には団体が中心となって、ボランティア活動がコーディネートされている。では、実際にボランティアを受入れる団体にとっての価値というのは、いくつかあるかなと思います。まず、一番単純には、担い手が増えるということになると思います。そのボランティアを、提供する側の担い手がもちろん人として必要なので、まずは担い手。今回学生さんというところになりますが、やはり新しい発想だったり、新しい視点だったりというのは、若者ならではの特徴だと思いますので、そういう新しい発想が持ち込まれる。それによって新しい人たちが出入りすることで、団体が活性化するというような意義があると思います。これはですね、よく言われることですが、やはり同じ人たちが、特定の取り組みを長く続けている。もちろんこれにも価値はあると思いますが、そこに新しい発想だったりとか、普段とは違う考え方、もしくはいやぁそれってできないんじゃないのとか、それって必要なの、みたいな、そういうアイディアが団体に持ち込まれることで、むしろ議論が活発化して、自分たちのやりたい方向、自分たちがやらなければいけない方向っていうのが、研

ぎ澄まされていくと思います。そういったプロセスの中で、何が必要かというと、やはり若い力、新しい発想だったりもしますので、学生の皆さんがそういったボランティア活動に参加することによる、団体にとっての価値っていうのはとても大きなものがあるというふうに思います。その上で、2点目、社会にとってということを書いています。ボランティア活動というのは、基本的には社会、広域のために行われるものなので、社会にとってどんな意義があるかというのは、常に考えながら活動してもらえたらと思います。よく言われるのが、ボランティア活動は、社会課題、何かしらの課題を解決するための存在であるというふうに言われますが、私たち日本NPOセンターは、課題解決だけが、実はNPOや市民活動団体の役割ではないというふうに考えています。いろんな多彩なボランティア活動が行われることによって、もちろん課題も解決される側面もありますが、もう一つには、豊かな価値、新しい社会価値が生まれていくという価値創出という側面があるというふうに考えています。課題課題課題ということで、取り組むだけではなくてですね、先ほどお話した、子どもたちの体験活動となった時に、それを運営する、私たち自身もたくさんの学びがあって、そこは本当に豊かな関係性ができたりするということがあると思います。もっと言うとですね、NPOや市民活動っていうのは、そういった価値観、そういった考え方を持つ市民をですね、もっともっとふやしていく、担い手を育んでいくという側面があるというふうに思いますので、NPO、市民活動団体、課題解決というふうに言われますが、課題解決という側面ももちろんありつつも、豊かな価値を生み出していこうという、そういった団体である、そういった取り組みであるということも、ぜひ知っていただければと思います。なので、受入れるNPOの皆さんも、担い手が増えるということだけではなくてですね、学生さん若い人たちが自分たちの活動に参加いただくことによって、どんなような価値が生まれるか、どんな価値を創出していくか、ということの視点を持ってですね、ぜひ、受け入れ先も考えてもらえたらなと思いますし、参加する学生自身もですね、ぜひ、自分たちがどんな価値を生み出していくのかということも考えながらですね、参加してもらえると、とても豊かなボランティア活動になっていくのではないかなというふうに思っています。自分自身にとってということについてはですね、この後、フォーラムのディスカッションがありますので、ぜひその中でですね、皆さんからも、自分たちの経験を話していただきたいなと思っていますので、ここでは、多くは語らないことにしたいなと思っています。皆さんの言葉でですね、どんな価値が、ボランティア活動によってできてるかなということを考えていただけたらなと思っています。最後のスライドになりますが、ボランテ

ィア活動を通じた学生の学びや成長ということも、これも、この後のフォーラムで大いに語っていただきたいというふうに思っています。一つ、共通していえることは、チャレンジができる環境があるんじゃないかというふうに思っています。やっぱりボランティア活動でも、NPOの活動でも、すべて、もちろん責任がある取り組みなので、自分たちがやった行動の結果というのは、様々な影響を与えていきます。失敗することだったりとか、うまくいかないことっていうのもたくさんあると思います。その中で、学生さんだからこそ、若いからこそっていうところで言うとですね、このチャレンジができる環境があるっていうのは、とっても大きな特徴だというふうに思っています。私も、学生時代に、様々なボランティア活動、もしくはですね、そのボランティアをきっかけにボランティアリーダーとしてですね、自分自身が、いろんな活動の責任者として、企画運営に携わってまいりましたが、本当にたくさんの失敗をしたなというふうに思っています。ただ、失敗もですね、周りのですね、大人たちが本当にカバーをしてくれて、支えてくれたなというふうに思っています。そこには、私自身の経験になりますが、失敗をしてもいいんだとか、チャレンジができる環境、やりたいようにやってみようというような環境が与えられていたんだなというふうに思っています。ぜひ、皆さんにも、こういった学生時代だからこそ、若者だからこそっていう立場を生かしてですね、このチャレンジができる環境が、実はボランティア活動の中にはたくさんあるというふうに思っています。これは、仕事ではなかなかないですね、余白があるんじゃないかなというふうに思っているんですね。その人たち自身が自由な発想ができ、自分たちの行動次第では、いろんな働きかけができる領域がたくさんあると思っています。これはもうボランティア活動の大きな特徴の一つなので、ぜひその余白を生かしてですね、たくさんのチャレンジをして欲しいなというふうに思います。この後のセッションの時間では、実際に学生ボランティアに取り組んでいる皆さんからもお話の中で、そういったヒントがたくさん得られたらと思いますので、ぜひ、この後の時間も聞いていただければと思います。最初のお話は以上になります。ありがとうございました。

事例紹介「せたがや学生ボランティアネットワーク会議」を通じて実現した活動（子ども食堂の実現に向けた取り組み）【藤本】

きずなInternationalでは、せたがや学生ボランティアネットワーク会議を通して子ども食堂に参加することになりました。活動に至った経緯としましては、コロナで東北を拠

点とする、南三陸に行ってボランティアすることができなくなってしまって、震災から10年も経って、その現地のニーズも変わっていって、できることも限られていました。そこで関東近郊のボランティアで、何かできることがないかなということで、ずっと探していまして、いろんな社会福祉法人とか、に社会福祉協議会とかに行ってみたんですけど、なかなか活動に結びつけることができませんでした。たまたま縁があって学生ネット会議の方に参加させていただいて、この子ども食堂という活動があるよということを、世田谷ボランティア協会の方からお聞きして、そこで何でもとにかく挑戦してやりたいということで、参加させていただいたというのが活動に至った経緯になります。現状としましては、コロナの影響で子ども食堂をやれる状況ではないので、周囲から固めていくというか、今この中でもできることを探して子ども食堂に向けて、子ども食堂がコロナが治まって活動できるようなった時にすぐに活動できるように、例えば、子ども食堂に使う梅丘ボランティアビューローというところの食堂があるんですけど、その食堂の掃除等を、子ども食堂実行委員会さんという、また別の団体さんがあって、そこと協力してやるという形で進めていく、という感じです。今のところ打ち合わせは1回ほどしかやっていないんですけど、何となくきずなInternationalのやりたいことと、子ども食堂実行委員会さんっていう、既存の団体さんと話し合いをして、お互いがやりたいことのすり合わせを徐々に進めていっているという形です。以上です。

「せたがや学生ボランティアネットワーク会議」参加団体の活動発表

【国士舘大学　児童教育研究会】

こんにちは。国士舘大学児童教育研究会です。私たちは、活動内容として小学生に向けた企画運営をしています。実績としては、埼玉県にある吉見町にて小学生向けの大きなイベントを2泊3日でおこなったり、世田谷区若林児童館で子供との交流会などを行っています。団体が目指しているものとしては、「お友達、学生それぞれが将来に繋がる活動を」を目指して活動しています。適時、公式ツイッターやインスタグラムに活動内容を載せているのでぜひ確認してみてください。見てねー。

【日本大学　文理学部　日本大学文理学部学生国際ボランティアグループSalamat“A”】

皆さんこんにちは。私たちは、日本大学文理学部学生国際ボランティアグループSalamat“A”という団体です。私たちは主に日本大学文理学部にて、フィリピンの学生の

教育支援を行っております。ここからは、概要ではありますが活動について詳しく説明していきます。私たちの活動は、主にこの四つで構成されています。一つずつ見ていきましょう。まずは、物品支援です。フィリピンでは学習用品、特に筆記用具やノートが不足している状況にあります。そこで私たちは、日本国内で使わなくなったもの、特に筆記用具や鍵盤ハーモニカ、リコーダーを寄付として募集をかけて集まった物品をフィリピンへ送るという活動を行っています。これにより、フィリピンの勉強道具の不足わずかではありますが、解消をしています。次に募金活動です。私たちはフィリピンの学生が勉学に励むことができるように奨学金を毎年送っています。奨学金の集金方法は後程お話しますが、その一部が写真にある、「wish for child」です。この活動はフィリピンのクリスマスが始まる8月から募金を行います。キャンペーンが進むにつれて、成果をクリスマスリースとして明らかにします。募金者の名前を変えた飾りが増えるたびに、だんだん綺麗なクリスマスリースができ上がります。先ほどお話した奨学金の大部分がこのイベント参加です。新型コロナパンデミック以前の話にはなりますがSalamat“A”は、代官山、渋谷、上北沢等と様々な場所のイベントに参加し、そのお手伝い費という名目で奨学金をいただいていました。最大のイベントは文化祭の桜麗祭です。アクセサリーショップカフェなどを大規模に出店し売り上げはすべて奨学金に充てています。国際交流も行います。新型コロナパンデミック以前は、夏休みの機会を使って直接訪問しました。新型コロナパンデミックになってからは、オンライン国際交流会を実施しています。令和3年8月にもZoomにて、私たちが支援するフィリピンの学生と交流しました。その際は、クイズ大会や、Salamat“A”メンバーの紹介などを行いました。時間こそ短かったものの、参加した学生からは参加できてよかった。という声が多数ありました。以上のように、Salamat“A”は、様々なことを行っています。ここからは、メンバー募集について説明します。メンバーは少数精鋭となっておりますが、様々な学科系統が在籍しています。少しでも興味が出てきましたら、ぜひインターネット等で、日本大学文理学部学生国際ボランティアグループSalamat“A”と少し長い名前ですが検索してくださるとありがたいです。以上Salamat“A”をよろしくお願いします。ご清聴ありがとうございました。ナレーションは音読さんでした。

【日本大学　文理学部　児童文化研究会】

はじめまして。私たちは、日本大学文理学部の児童文化研究会です。子どもたちと遊んだり、イベントのお手伝いなど、児童館や小学校でのボランティアを主にやっています。

今、メンバー11人で活動していて、将来、学校の先生になりたい学生や小さい子の面倒見ることが好きな学生が集まっています。活動内容や実績、私たちの活動場所は、主に三つです。一つ目は、小学校です。小学校で開催されるイベントの設営や運営のボランティアをします。また、放課後に校庭等で子どもたちと遊ぶという活動もしています。二つ目は、林間学校です。泊まり込みで林間学校の先生として活動します。子どもたちを引率したり、イベントの進行します。三つ目は、児童館です。この三つ目が、私たちのメインとなる活動です。児童館で子どもたちと一緒に遊んだり、児童館でのイベントの企画、運営や、もともと児童館で行っているイベントのお手伝いをさせてもらっています。団体が目指しているもの。私たち児童文化研究会が目指しているものは、子どもたちとの楽しいコミュニケーションです。それを実現していくために、地域社会と連携していきたいです。よろしくお願いします。

【明治大学　きずなInternational】

明治大学きずなInternationalサークルは、東日本大震災を機に発足した明治大学公認のボランティア団体です。小中以前は、宮城県南三陸町を中心に活動していました。泊まりで活動を行っていましたので、アットホームな雰囲気ですぐに仲良くなれたと聞いております。以前の学習支援、南三陸の子どもたちと交流している時の写真です。勉強のほか、レクリエーションを楽しむ時間もありました。農業支援、南三陸では、農業の盛んに行われています。地元の人々に加わり、農作業のお手伝いをしていました。他にも、民間の再生や森が整備、公園づくりなども行っていました。南三陸のイベントやお祭りにも参加したことがあります。各地の災害ボランティアや防災や震災に関連したイベントに参加することもありました。南三陸は美しい山と海のある自然豊かな土地です。カキやウニ、タコなど海産物が美味しく、特産品となっています。次に、現在の状況について説明します。コロナ禍で、南三陸に行けないこと、また、復興が進んでおり、手伝えることに限りがあることから、きずなInternationalは新しくコロナ禍でも可能な活動を見つけることが、今後の課題となっています。昨年の秋頃、大学主催で行われる明大祭に参加しました。今年は残念ながら、本校学生のみの参加となってしまいましたが、メンバーの顔を知るきっかけになりました。明大祭では、南三陸の物産展も行いました。南三陸から取り寄せた海産物やグッズを販売し、多くの方に買っていただくことができました。こちらは、私たちがインスタグラムを使って、東北のお土産を紹介する、みちのくなうというアカウントです。

よかったらフォローをお願いします。最近では、千葉県の香取市に農業のお手伝いをさせていただきました。これからの活動、きずなインターナショナルは、地域の方々に協力をいただき、子ども食堂を作ることになりました。ただいま、企画準備中です。子どもたちの交流の場をつくれるように頑張りたいと思っています。以上となります。ご視聴ありがとうございました。

【明治大学　チャリティーサンタ世田谷明治大学支部】

こんにちは。NPO法人チャリティーサンタ世田谷明治大学支部です。突然ですがみなさん、チャリティーサンタってご存じですか。NPO法人チャリティーサンタは、サンタクロースを通じて世界中の子どもたちに笑顔を届けることを目標とし、2008年に設立された日本発祥の慈善団体です。具体的には、クリスマスイブの夜にサンタクロースに扮したボランティアが、お子様がいるご家庭にプレゼントを届けるサンタ活動、そして、サンタ活動の際にご家庭からお預かりした寄付金で、国内外の、災害や貧困など困難な状況にある子ども達への支援を行うチャリティー活動。この他、お子さんやそのご家庭を支援するさまざまな取り組みを行なっております。これまで、18,000人以上のサンタクロースで、のべ40000人の子どもたちにプレゼントを届け、困難にある3,000世帯以上に支援を行ってきた、今や日本の一大ボランティアプロジェクトです。全国30の都道府県、42の支部で活動を展開していて、そのうちの一つ、世田谷明治大学支部は、ボランティア参加メンバー、および運営スタッフのほとんどが、明治大学の学生を中心に形成されています。参加される皆さまに行なっていただくことは、実際にサンタクロースの衣装を着てご家庭を訪問し、子どもたちとコミュニケーションを取ったり、プレゼントを渡したりする訪問サンタの活動です。訪問当日にご家庭とメールでやり取りをしたり、サンタと同行して、より円滑に訪問ができるよう支援するサポートサンタさんも募集しております。実際に子どもたちを前にして、一人でサンタクロースを演じきれるか不安という方も大丈夫。参加者のほとんどがボランティア初心者、子どもたちとのふれあいも未経験からはじめ、講習会や訪問当日のロールプレイングを通じて、ひとりひとりが立派なサンタクロースとなり、自信をもって訪問を迎えます。世田谷明治大学支部は、以前、チャリティーサンタ埼玉支部に参加した現代表が、2020年に新たに立ち上げた支部で、今年で3年目を迎えます。参加日程は、基本的に直前の講習会とイブ当日のみの年2回なので、気軽なボランティアとして参加でき、ほとんどのメンバーがゼミやサークル活動など、他の学生生活との両立を図っております。当日は

例年、和泉キャンパス近くの区民センターに集合し、訪問までの間、事前準備をしながら、和気あいあいと活動します。学生が多くを占めるアットホームな環境で、他学部、他学年、男女さまざまなメンバーたちと交流できるチャンスです。訪問後もこの場所に帰ってきて、それぞれの感想を共有し、サンタたちにとっても思い出深い、イブの夕べを過ごします。ほんとに、可愛かったですね。あのね、あのねって言って、怪獣のことを詳しく教えてもらいました。去年応募していた家庭みたいだったので、全部、うんうんって素直に聞いてくれて、それがすごい可愛かったです。お子さんにとって人生長いので、たとえば親と喧嘩したり、親を嫌いになってしまったり、ときには恨みたくなるようなこともあると思うんです、子どもって。そういうときに、小さい頃に大切にしてもらったっていう思い出って、すごく大切だと思ってて。私たちの活動をお子さんが覚えていてくれることで、大きくなったときに「あぁ、大切にしてもらったな」っていう風に思えて、親といい関係を続けてくれたらいいなと。うちのサークルの活動内容って、いい意味であまりボランティアらしくないというか。ただ、クリスマスイブを楽しい日にしてほしいなっていう気持ちもありますし、これをきっかけにボランティアに興味をもってもらって、他の活動にも参加するきっかけになったら、もっといいなと思います。チャリティーサンタが子どもたちに送るのは、おもちゃやゲーム機だけではありません。幼い頃に周囲から愛された記憶は、その子の一生をつくります。だから今度は、あなたも誰かのサンタクロース。

【明治大学　ぱれっと】

　これから明治大学環境ボランティアサークルぱれっとについて、私、山田からスライド形式で紹介させていただきたいと思います。それではよろしくお願いします。目次です。ぱれっとは、ごみ拾い活動、エコキャップ回収活動、児童館の活動、コロナ禍以前にしていた活動、コロナ禍で模索した活動、ぱれっと今後の展望の七つを、今から説明していきます。まず、ぱれっととは、明治大学の環境ボランティアサークルで、部員数はおよそ60名ほどです。ごみ拾い活動を中心に、エコキャップ回収活動、児童館アルバイト等の活動も行っております。続いてごみ拾い活動について説明します。この活動の目的は、まちの美化の貢献、また自他のごみに対する意識改善というものです。これはぱれっとのメイン活動であり、月に2、3回ほど昼休みの時間に実施しております。1回の活動の参加者は10から20名ほどで、参加者同士の交流も楽しめる、継続しやすいボランティアと言えます。ごみ拾い活動の内容についてですけど、これは大学近辺の道のごみを分別しながら、拾うと

いった感じで、ごみは可燃ごみ、不燃ごみ、ペットボトル、ビン、缶に分けられます。そして回収したごみ袋は、大学の倉庫に保管した後、大学提携の業者によって引き取られます。ごみ拾い活動の反省と今後の展望についてです。まず、ごみ拾い中、車、自転車に気をつける、これはごみ拾い中、部員が道に広がったりして危ない場面が多々あったので、ここに挙げました、そして固定されがちなごみ拾いのルートをふやす。最近、ごみ拾いを実施するルートが、同じように、同じ道を使いがちになっているので、ここに挙げました。そして、これはコロナ禍で厳しいため、願望に近いですけど、可能であれば、近隣の老人や、子どもたちと一緒に、こうした活動をやってみたいというものがあります。続いてエコキャップ回収活動について説明していきます。この活動の目的は、途上国の子どもたちのワクチンのために、エコキャップを回収して寄付するといったもので、キャップが貯まり次第、不定期で実施してきました。1回の参加者は10から20名ほどです。この活動は、複数のグループに分かれ、大学構内に点在するエコキャップ回収袋から中身を回収するといったもので、回収後は、中身のエコキャップの点検、仕分けをします。そして、仕分けをしたら倉庫に一時保管し、回収業者に引き渡します。回収業者に引き渡した後は、業者さんによって、エコキャップが売却されて、その利益がワクチンの製造費になるといった次第です。この活動の反省と今後の展望ですが、まず、あまり知られていないエコキャップ回収活動の目的と内容をもっと、SNSや掲示物等を使って周知させる、といったものと、回収業者との連携をよりスムーズに行うといったものと、また世田谷ボランティア協会さんと、今検討中の段階ですが、世田谷区のボランティアビューローなど、学外にもエコキャップ回収箱を設置するといった案が今出ております。続いて児童館での活動について説明していきます。この活動の目的は、児童館の仕事を手伝いながら子どもたちと交流する。といったもので、西荻南児童館での児童館アルバイトとなります。春休み夏休み年始の時期に行われていて、ハロウィンや縁日などのイベントもあります。基本的に参加者は5から10名ほどとなります。児童館での活動、児童館アルバイトの内容は、子どもたちがけがをしないよう見守りをしたり、カードゲームやボードゲームで一緒に遊んだりするといった内容です。続いてこれは、ぱれっとがコロナ禍以前にしていた活動の紹介となります。スライドを20秒ほど静止しますので、興味がある方はぜひご覧ください。スライド変わります。続いて、これはぱれっとがコロナ禍でも模索した活動となります。まず、オンライン活動、これは環境等をテーマにしたゲームを交えて、部員同士の交流を深めつつ、環境の知識を身につけるといったもので、環境クイズや環境ワードウルフなどといったものを実

施しました。二つ目に環境かるたづくりというもので、遊びを通して環境に触れて欲しいという思いから、児童館の子どもたち向けに環境をテーマにしたかるたを、Zoomを通して作成といった活動となります。最後に、ぱれっとの今後の展望についてですが、2021年度は、コロナ禍で、今までの活動ができない、また引き継ぎ等が困難、といった問題が生じ、基本的にはメインのごみ拾いやエコキャップ回収の現状維持が中心となった年でした。そのため2022年度では、他のサークルや団体さんと交流を作ったり、コロナ禍でもできる活動、コロナ後にしたい活動などを企画、実施したいと考えております。ご清聴ありがとうございました。

パネルディスカッション【深山、榎本、若田部、鈴木、山本、藤本、小笠原、山田、上田】

（深山）

ただ今より、パネルディスカッションを開催いたします。パネルディスカッションのファシリテータを務めさせていただきます社会福法人世田谷ボランティア協会の深山です。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、早速でありますけれども、パネリストの方に、簡単にそれぞれ自己紹介と所属されている団体の紹介をお願いしたいと思います。皆さんよろしくお願いいたします。

（榎本）

国士舘大学児童教育研究会の榎本理乃です。児童教育研究会では、学生が作成したゲームや劇を子どもたちに楽しんでもらうボランティアイベントを、年3回から5回ほど行っております。最も大きなイベントは、8月に埼玉県の吉見町で行う夏のあおぞらおもしろ教室で3日間かけて、吉見町の小学生とともにイベントを行います。普段はイベントに向けての準備を行っています。

（若田部）

昭和女子大学ENVOの若田部有夢です。昭和女子大学ENVOでは、学生自身がボランティア活動に参加するとともに、ワークキャンプなど、学生がボランティアを企画したり運営したりという活動も行っております。

（鈴木）

日本大学文理学部学生国際ボランティアグループSalamat“A”の鈴木歩望です。Salamat“A”では、主にフィリピンで、教育支援及び物品支援を行っております。よろしくお願いします。

（山本）

日本大学文理学部児童文化研究会の山本英弥です。私が所属している児童文化研究会では、児童館や小学校が主な活動場所で、そこでイベントの企画や、子どもたちの遊び相手になるなど、子どもたち向けのボランティアとして活動しています。メインの活動としては児童館で2ヶ月に1度のペースで工作イベントを企画したりしています。本日はよろしくお願いいたします。

（藤本）

皆さんこんにちは。明治大学きずなInternationalの藤本と申します。明治大学きずなInternationalは、東日本大震災の復興支援として、宮城県の南三陸町の復興支援として発足した団体です。現在は震災から10年が経ってハード面での支援ができなくなってしまって、震災から10年でコロナと重なってしまって、現地に行くことができなくなってしまったので、関東近郊でできるボランティアを探しています。以上です。

（小笠原）

NPO法人チャリティーサンタ世田谷明治大学支部の明治大学情報コミュニケーション学部3年、小笠原侑美と申します。私たちの団体では、クリスマスイブの夜、依頼があったご家庭にサンタさんとして訪問し、事前にお預かりしているメッセージとともにプレゼントを渡します。その際お預かりするチャリティ金を経済的困窮、被災、難病その他家庭の事情で、クリスマスを迎えることが大変な家庭を支援するための資金としています。2020年度に支部が発足して、2021年度2回目の活動では、ボランティアが34人、プレゼントを届けた子どもたちが36人を達成することができました。本日はよろしくお願いいたします。

（山田）

皆さんこんにちは。明治大学商学部2年ぱれっと支部長の山田龍と申します。ぱれっとは明治大学の環境ボランティアサークルで、主に月に2、3回ほど大学周辺のごみ拾いを行っております。また、ほかにもエコキャップ回収活動や児童館での活動なども行っております。本日はよろしくお願いいたします。

（深山）

はい、ありがとうございます。そして、先ほど基調講演をしていただいた日本NPOセンターの事務局次長、上田英司さんにも、ディスカッションに加わっていただきます。それでは、本日は皆さん一人一人のボランティア活動の有無や、活動の体験から得たもの、また今感じていることなどを聞かせていただきたいと思います。まずですね、大学に入って、サー

クルに入られたんですけれども、サークルに入ったその動機っていうのをまず聞かせていただいてもよろしいですか。どうしてその活動をしたかったのか。その辺りちょっと、お伺いしたいと思います。それではどなたかサークルに入るきっかけを、お話いただけますでしょうか。小笠原さん。

（小笠原）

はい。私がサークルに入ったきっかけは、まず、チャリティーサンタ世田谷明治大学支部は私が設立した支部なんですけど、だから入ったっていうより、自分で作ってみんなに参加してもらったっていう形になるんですが、そもそも私がチャリティーサンタを始めようって思ったきっかけは、正直言うと暇だったからっていうのが大きいんですが、2019年度、私が大学一年生の時に、チャリティーサンタの埼玉支部というところで活動に参加してみて、すごくすてきな活動だなっていうふうに感じて、でもやっぱりお子さんに伝えられない活動、サンタさんなので、大々的な広報ができなかったりすることから、やっぱりすごく知名度が低い活動だな、でもすごいとてもいいことをしてる活動だなっていうふうに思いました。それで、私、すごく友達と楽しいとかうれしいっていう気持ちを共有するのが好きで、何かあるとすぐ友達に昨日ね、みたいな感じでお話するんですけど、その延長上みたいなところにもある感じで、私が、参加して楽しかった活動をみんなにもっとやってもらいたい、知ってもらいたいっていうふうに思ったときに、ただ、来年、この活動を一緒にまた参加しようよっていうよりも、私が新しく1から支部を作るから、みんな一緒にやってくれないかなっていうふうに誘った方が皆も興味を持ってくれるだろうし、参加してくれる人も、たくさんいるんじゃないかなと思って、自分で支部を作るという、決断をしました。

（深山）

はい、ありがとうございます。みんなで気持ちを共有したいというところで始めた活動なんですね。新しく作られてどうですか。

（小笠原）

やっぱり支部を作るって決めたときは、まだコロナ禍の前だったので、すごいおっきいサークルにするぞって意気込んでいたんですけど、コロナになってしまって、すごく難しかったです。最初、大学で友達もたくさんいたので100人くらい集められるかなって思ってたんですけど、実際やってみたら、コロナ禍も相まって、結局1年目の活動の時は、25人くらいしか集まらなくて、でも、それでもすごいたくさんの人に参加してもらえたなっていう

ふうに思ってるんですけど、でも、コロナ禍だからこそできたこともたくさんあったと思うので、これでよかったかなって思っています。

（深山）

ありがとうございます。また後でコロナ禍のことは伺いたいなと思っています。他にこういうきっかけでサークル入りましたとか、立ち上げましたとかいうの教えていただけますか。榎本さん。

（榎本）

私がこの部活に入った理由は、子どもを含めた人と関わることが好きで、学生生活を通して、多くの人と関わりたいと考えていたので、SNSを通して、楽しそうに活動する先輩方の姿に行かれて、入部を決断しました。また、活動が子どもたちにとって楽しい思い出の一つとなるよう、どうしたらより楽しんでもらえるかを考えることや、その活動を通して、自分がどのような経験ができるのかを知ってみたかったという好奇心があったことも、入部のきっかけです。以上です。

（深山）

はい、ありがとうございます。鈴木さん、いかがでしょうか。

（鈴木）

僕はこのサークルにこの活動に入った理由としては、特に深い理由はなくて普通に友達に誘われて入った感じです。あと、元々英語を使った何かをしたいと思ったので、国際ボランティアっていうその国際の文字に引かれて、入ったってのは正直あります。以上です。

（深山）

ありがとうございました。皆さんサークルに入るきっかけが、それぞれあって、なかなか面白いなと思いました。次に、ボランティア活動をして印象的だったこと、活動をしていてよかったと思ったエピソードなどありましたらお聞かせ願いたいんですが、これもどなたかご指名します。山本さんいかがでしょうか。

（山本）

はい。印象的だったことは二つあります。一つ目は一つのイベントに対し、これだけたくさんの打ち合わせや大人が考え、動いているということに驚きました。小学生の子どもたちが参加するイベントの運営やボランティアをやる機会が多いのですが、工作系のイベントだったら材料に鋭利な部分がないかや、遊びのイベントなら仲間外れになる可能性がないかなど、時間で言うとたった30分とか1時間のイベントなんですけど、子どもたちのため

に、何週間も念入りに考えている児童館や小学校の先生、地域の方の姿がとても印象的でした。二つ目は、子どもたちの成長ですね。昨日泣きじゃくっていた子どもは今日になればその分強くなっていますし、1人だった子は簡単なことがきっかけで、みんなと遊ぶようになります。多分、今僕らの年齢で、昨日泣いていた友達が、今日になってけろっと来るっていうのはなかなか難しいと思うんですけど、子どもたちはそういうことができて、こういったボランティアをしていく中で、その子どもたちの急激な成長を目の当たりにしたことが印象的でした。以上です。

（深山）

ありがとうございます。それでは、小笠原さん。

（小笠原）

まず、私が印象的だったことは、ちょっと課題だなっていうふうに感じている部分でもあるんですけど、私たちの団体では、基本的にはご家庭にお子さんに渡すプレゼントをご用意していただくんですけど、その際にいただくチャリティ金で、プレゼントを用意してお子様に届けるっていう活動も行っていて、その際は、基本的に絵本をプレゼントするっていうふうに、決まっています。その時に、サンタさんが、その絵本をプレゼントするご家庭に行ったときに、お子さんに、ゲームが欲しかったのにって言われちゃったことがあったらしくって、それを聞いたときに、私たちはそういうご家庭には、お子さんがほんとには欲しいものをあげることができないけど、その時のサンタさんの声掛けによってはすごい、より良い思い出にすることも可能だというふうに考えていて、例えばそのときに、これ、妖精さんがサンタさんに伝えるもの間違えちゃったね、ちょっと今年はこれでもいいかなっていうふうな声掛けだとか、あとは、これでもサンタさんのすてきな魔法がかかってるから、読んでいるとすごいもっといい子になれるよとか、そういう本当に欲しいものがあげられなくても、声掛け次第で、すてきな思い出にできるっていうのはとても印象的なことだったなと思います。うれしかったこととしては、二つあって、まず一つ目は絵本を届けるお家は、お子さんの事前情報は少しもらうんですけど、本当にそのお子さんが興味を持ってくれる本かっていうのは正直わからない部分があって、でも、「すみっコぐらし」、キャラクター物の絵本をあげるお家があったんですけど、そのお家の子がサンタさんが行ってみたら、偶然そのキャラクターの服を来ていたっていうことがあったらしくて、すごい、よかったなって思いました。もう1個は、2年連続で、私たちの団体に申し込みをしてくださったご家庭があったんですけど、そこのお家の男の子がサンタさんが2年目に

来たときに、サンタさんがピーマン食べれるように頑張ろうねって言ってくれたから、ピーマン食べる時はサンタさん見てるかなって思いながら食べてたよって教えてくれたりとか、あとピアノの発表会もクリスマスの曲を引いてサンタさん見てたんだよね、みたいな感じで言われたよっていうふうに、実際に訪問したサンタさんから教えてもらって、そういうふうにお子さんの実生活に私たちの団体が関われているっていうことを知って、本当にやっていてよかったなっていうふうに思いました。以上です。

（深山）

はい。ありがとうございます。藤本さんいかがですか。

（藤本）

明治大学きずなInternationalの藤本です。僕がボランティア活動していて印象的だったこととしては、千葉県に農業のボランティアに行った際に、給料というか、お金をもらったっていう経験です。なぜそれが印象的だったかと言いますと、大学生に入る前、高校生の時にずっとボランティアをしてみたかったんですけど、ボランティアは、何か単純にお手伝いをする、無償でお手伝いをして活動するっていうイメージでいて、それで大学生になってボランティア活動を始めたんですけど、初めてそのボランティアに行った時に、千葉県の農家さんから有償でボランティアをして、給料をもらってやるっていうことで、こちらとしてはタダでお手伝いをさせていただきたいっていう話をしたんですけどそのなんで、お金をもらえるんですかっていうことを聞いたときに、そこの農家さんが言っていたのが、お金をあげることによってこちらとしてもやる気が出るというよりかはお金を出すことによって、持続可能にどうしても無償だと、ずっと定期的に来るっていうことができなくなってしまうっていう、もちろん交通費もかかりますし、お金がかかるっていう以上はそれに合った、お金を払うことによって、持続可能なボランティアに繋がるっていうことをおっしゃっていたので、それはちょっと、僕の高校生の時にイメージしていたボランティアのイメージと、大学に入って実際にやったボランティアのイメージが変わった一つのきっかけになりました。それが、僕がボランティア活動していて一番印象的だったことです。以上です。

（深山）

ありがとうございます。今お金をもらってっていうお話もありましたけれども、お仕事とはまた違うのかなと聞いてて思いました。お仕事とか趣味ではなくて、ボランティアだからこそのよさっていうのはなんでしょうね。そのあたり、お伺いしたいんですけれども、

ボランティアだからこそ味わえることってありますか。山田さん、いかがでしょうか。

（山田）

そうですね、僕が思うボランティアだからこそのよさっていうのは、ちょっと僕の偏見が入っちゃうんですけど、今の世の中って何かのために、何らかの利益のために、言い方悪いですけど、見返りを含めて、そのために行動したり、頑張ったりするっていうことが多いと思うんですけど、世の中の息苦しさから離れて、みたいな感じで、そのボランティアっていう、もちろん自分のためにもなるんですけど、人のためにやる時間というのが、息抜きというか、結果的に、無償の活動っていうのが、結果的に自分のためになる場面もあるのかなって思います。以上です。

（深山）

はい。若田部さん。

（若田部）

私が思うボランティアだからこその楽しみだったり自由だったりっていうのは、活動の手順とか方法とかがいくらでも無限にあるところなんじゃないかなって思います。例えば、ボランティア活動をする中で最終的にこうしてああしたいという目標はあったとしても、そのノウハウだったりとか活動する上でのコツだったりとかっていうのは、そこに集まってる人の分だけ、種類があるなというふうに活動していて思いました。たくさんの活動に参加するために、いろいろな新鮮な視点にとても驚かされました。以上です。

（深山）

ありがとうございます。上田さんは、ボランティアコーディネーターとして、今までたくさんのボランティアをしたいという学生さんともお会いしてきたと思うんですけれども、そういう方々の原動力ってどういうところにあると感じていらっしゃいますか。

（上田）

ボランティアの動機というのは、本当に多様なものだと思います。先ほど皆さんからもお話しいただいた通りだと思います。その中で、一つの特徴としては、冒頭の基調講演の中でもお話をしましたが、大学のゼミの一環だったりとか、何らかの学内の行事の一環として参加されてる方っていうのも1定数いるんじゃないかなと思っております。で、入口はもう多様なので、ゼミの一環でとか、授業の一環できましたというのは、あるかなと思うんですけど、ぜひそれを続ける動機というのがやっぱ人との出会いなんじゃないかなというふうには思います。そこで出会った、例えば、子どもたちとの出会いだったりとか、保護

者の方の出会いだったりとか、自分が取り組んでる分野の大人たちとの出会いというのがあると思います。やっぱボランティアならではだなと思うのは、やっぱその人たちの、哲学だったりとかですね、生き方みたいな場面に触れる機会も非常に多いんじゃないかなと。で、自分が継続するモチベーションというのが、やはり内発的に湧いてくるというのはとっても大事なんじゃないかなと思います。先ほど金銭の話もあったんですけど、そういったのはある意味、外的な動機の誘発というところになると思うんですけど、続けたいっていうのはやっぱり内発的な動機があるかなと思います。その内発的な動機は多様であっていいと思いますが、自分が何かこうやるぞという、最初のきっかけは、授業だったりとか、サークルの一環でということ、ゼミの一環でということはあるかもしれませんが、ぜひ、皆さんに大事にしてほしいなと思うのは、続けるときは、ぜひ内発的な動機を確かめて、自分自身が何をやりたいかというのを、持っていくというのはとても大事なんじゃないかなと思います。そういった人たちこそ、続いているんじゃないかなというふうには思います。ぜひ、モチベーション持って、次はリーダーになっていくとか、そういうステップも考えて欲しいなと思います。以上です。

（深山）

はい、ありがとうございます。内発的な動機が、その後の継続的な原動力になっていくということですね。ボランティア活動の中で、皆さん、いろんな方と出会う機会があると思います。そのいろんな方とですね、交流する中で、気をつけていることとか、あと、それを楽しむ秘訣みたいのがありましたら教えていただきたいんですけれども。鈴木さん、いかがでしょうか。

（鈴木）

一番大切にしていることは、ちょっと当たり前かもしれませんけど、相手の価値感を否定しないことです。やっぱり海外の方と交流するにあたって、そういう自分とは違う環境で生きてますし、違うバックグラウンドがあるということで、相手の価値観を否定しないということで、コロナ前で、コロナウイルスが蔓延する前は、現地とかフィリピンに実際に行って学生たちと訪問、交流したんですけど、フィリピンに旅立つ前のレクチャーとして、必ず相手の話をしっかり聞く、あと自分の話ばっかりしない。もうすごい口酸っぱく言われていました。あともう一つ、楽しむ秘訣は、やっぱり会話を楽しむことです。後程もちょっと言及しますが、最近オンライン交流会なるものを開きまして、フィリピンの学生と日本のSalamat“A”メンバーで、Zoomをつないで交流したんすけど、その時も、やっぱり

英語を使うといって、メンバーが怖気づいてしまったんですよね。英語使うのかっていう感じで。ただ、その時もやっぱりフィリピンの方ってすごいたくさん話してくれるんですよ、いろんなことを。だから、僕らが何か言うと、バーッて返してくれるっていう感じでとてもやさしい方だったので、本当に、まずは会を楽しもうと言うことをずっと言っておりました。以上です。

（深山）

ありがとうございます。山本さん、お願いします。

（山本）

先ほどの鈴木さんの価値観の話と少し似ているんですけれども、関わる人の目線を大事にすることが多種多様な方々との関わる秘訣だと思います。私は小学生の子どもたちと関わることが多いのですが、今の私が考えつくことができないような考えを持つ子が本当に多くてですね、例えば、児童館に遊びに来たのに一人で遊びたい子、今思いますと、それは、一人で遊びたい子もいるだろうって思うんですけれども、当時の私は、せっかくみんなが集まる児童館ならば、みんなで遊ぶべきだろうって考えてたんですね。しかし、児童館に来る子どもたちってのは、目的は様々なものでした。確かに、遊園地に行くとして、ジェットコースターが目的だったり、お化け屋敷が目的だったりみたいな、いろんな目線があるんだなって、今思えばわかるんですけど、当時はそれが衝撃的で、その際、児童館の先生に、その子の目線を尊重するようにっていうふうに教わりました。これはもちろん考え方もそうなんですけど、物理的にその子の目線に立って、一緒に話すってことも大事だよって言われたんです。てことは、目線の高さを、考え方ももちろんそうなんですけど、あなたの目線をちゃんと考えてるよっていう、姿勢を伝えることも大事なのかなっていうふうに気づいたので、今でもそれを気をつけて活動していますね。以上です。

（深山）

はい。ありがとうございます。若田部さん、お願いします。

（若田部）

先ほど、山本さんからもあったように、私も同じ高さの目線を保つっていう意識が大切なんじゃないかなっていうふうに思いました。さらに、それと同時に、経緯を忘れないというところが、ボランティアをする中で、一緒に楽しむ秘訣なんじゃないかなというふうに思っています。もちろん、仲を深めるということは、活動をするにおいて大切だと思うんですけれど、その上で、その相手に対してだったりとか、その活動になぜ至ったのかって

いう背景を忘れずに、さらに適切な距離感を保つことが、より良い関係を築くことに繋がるんじゃないかなというふうに思います。以上です。

（深山）

よくわかります。世田谷区は多様性を認めるようなことに、すごく土壌があるかなと思っています。今日、参加しているみんなも相互理解や包摂的な社会などに土台があると思いますが、みんなが地域の活動に参加していく中で、そういう土台を広めていくために、こんなことをしていけたらとか、こんなことがあったらいいなっていうことありますか。榎本さん。

（榎本）

私が思うに、子どもたちに、大人が、身体障害者の方だったりとか外国から来た方だったりに親切にしなさいとかっていうと思うんですけど、なんで親切にしなきゃいけないのかっていうのは子どもたちは、多分言われてるだけじゃわからないと思うんで、実際にその身体の障害を抱えた方と関わってみたり、高齢者の方と関わってみたりすることで、実際にその方の気持ちがわかったりすると思うんで、いろんな方たちと関わる機会っていうのを子どもたちにつくるイベントをやってみたいなあと思っていて、例えば、外国の方と関わるであれば、その国のゲームを一緒に行ったりだとか、料理を一緒に作ってみたりだとかして、子どもとその外国の方や高齢者の方だったりを関わる機会を多く作ってみたいなというふうに思っています。以上です。

（深山）

はい。ありがとうございます。若田部さんはいかがでしょうか。

（若田部）

私は、地域の人々の多様性だったりとか相互理解を深めるためには、性別だとか年齢がバラバラな人たちが一堂に集まれるようなボランティア活動を行うことができればいいんじゃないかなというふうに思います。どうしても個人的にだったりプライベートで遊んだりとか、食事に行くのって、例えば同性の友人から同世代の友人とかが多くなってしまうと思うんですけれど、やっぱり同世代とか年代とか関係なく集まれるっていうのがボランティアのよさなんじゃないかなと思うので、そのような人たちと関わる機会を、得られればいいんじゃないかなと思います。またそういう機会があれば、身近にいろんな顔見知りの人たちができるんじゃないかなというふうに思います。以上です。

（深山）

はい。ありがとうございます。山田さん、よろしいですか。

（山田）

様々な立場にいる人のこと、その人たちがどのようなことを思いながら暮らしているかなど、地域の人に伝えたり、広めたりする機会自体がもっと広まればいいなと思っております。例えば、町の施設にあるポスター等の掲示物だったり、学校での教育活動や講演会などですね、榎本さんや若田部さんがおっしゃった通り、直接、関われる機会があればもっといいと思います。ポスター等の掲示物等で受動的にでも頭に残る機会があればいいと思っております。そうすれば多様な立場にいる人たちのことや、その人たちの暮らしとかが頭に残り、お互いのことを理解し合いながら暮らす土台がつくれるんじゃないかなと思います。以上です。

（深山）

ありがとうございます。ボランティア活動の可能性がすごく感じられました。大学を卒業された後、地域活動やボランティアをしてみたいと思いますか。榎本さん。お願いします。

（榎本）

私は積極的にボランティアを行っていきたいと考えていて、あと個人的ではあるんですけど、私は大学で図書館司書の資格を取得したいと考えているので、図書館を通して、人と関わるボランティアを行いたいと考えています。例えば、現在でも結構あるんですけど、読み聞かせであったり、図書館から離れた場所に住んでいる人々に移動図書館として図書を提供したりといった、地域の人々に図書館への関心を持っていただけるような活動をしたいです。また、幼稚園や小学校だけでなく、福祉施設を訪問して、図書をもとにした劇や人形劇を行って、原作である図書に関心を受けて、図書館に足を運んでいただく機会をふやしたり、施設に提供して、図書に触れ合っていただく機会をふやしたりといったボランティアを行ってみたいと考えています。以上です。

（深山）

藤本さん、お願いします。

（藤本）

そうですね今大学2年生なんですけど、大学入学した当時からもう、コロナが広まってしまってボランティア活動自体がそもそもできないっていう2年間を過ごしてきて、例えば、昨年あった、熱海の災害であったり、台風の被害であったり、そういう被災地のボランティアっていうのをずっとやってみたいと、本当はないのが一番なんですけど、日本は天災が

多い国なので、必ずどっかで起こる。そういう時にやっぱり学生、一番参加しやすい、動きやすい属性だと思うので、参加してみたかったんですけどなかなかできないっていうことで、社会人だったら、大学生を卒業した後、大学を卒業した後、でも休日を利用してそういう災害があった、被災地にボランティアに行ったり、あとはそうですね地域活動、例えば今、きずなInternationalでは子ども食堂の活動に参加させていただいてるんですけど、そういう活動は、長期的に行われるものでもあるので、そういうところに、長期的なスパンで活動に携われたらいいのかなと考えています。以上です。

（深山）

山本さん、お願いします。

（山本）

僕ももちろん、大学を卒業した後のボランティアをしてみたいと思います。理由はいくつかあるんですけど、大きく分けて二つあります。一つ目は何より楽しいからですね。特に児童館や小学校でボランティアをすると、子どもたちの純粋な楽しさに触れることができます。何かすごい大きな小学校でお祭りのイベントをやるっていう活動じゃなくても、子どもたちと、例えば鬼ごっこするみたいな、全然大小関わりなく、子どもたちの純粋な楽しに触れると、これを忘れないでおきたいなという気持ちになってですね、結構気分が変わり、自分の今後の活動だとかを改めて考える機会にもなります。二つ目は恩返しですね。恩返しっていう言葉が合ってるかわからないんですけど、私が小学生の頃、たくさんのイベントや場所で遊んだり成長してきたんだと思います。そのイベントとか場所っていうのを、今では自分たちがつくれる側の立場だと思いますので、私が子どもの時にこうもらった場所っていうのを、今の子どもたちに渡すために、このボランティアを続けていきたいなというふうに思っております。以上です。

（深山）

ありがとうございました。同年代の方は、ボランティアに参加している方もいるし、参加していない方もいらっしゃると思いますが、周りにボランティア活動をすることに迷っている人がいたら、どうやって働きかけるのがいいか。何か良いアイディアとかありますか。山田さん、いかがでしょうか。

（山田）

何か新しいようなやり方は思いつかないんですけど、とりあえず僕は、ボランティア活動っていうものが意外と気軽にできて、そこまで、自分の負担にならないことを、知っても

らうことが大事だと思います。僕の友達にもそういう人がいたんですけど、その人は、ボランティア活動をすることに、結構興味を持ってたんですけど、活動に対して、結構過剰に責任の重さを感じていて、それで参加を迷っていました。そうした人のために、ボランティア活動はもちろんものによるとは思いますが、意識がそこまで高くなく、気軽に参加できるということを、知り合いの口コミだったり、またキャッチコピーを使って町の掲示物やSNSなどで、広めていくと、もっとみんな参加しやすくなるのかなって思います。以上です。

（深山）

小笠原さん、お願いします。

（小笠原）

私も山田さんと同じで敷居が低いっていうことをみんなに知ってもらうことが大切だと思っています。私自身、実際に団体を立ち上げる際に、周りの友達を誘って、団体を作ったんですけど、今、参加してくれてる人たちの中でもともとボランティアに興味があったっていう人たちは多分いなくて、その中でも皆が参加してくれたのはやっぱり、私たちのサンタさんのボランティアの場合は、特にその敷居は他のボランティアよりは元々低かったというのもあると思うんですけど、私とかが、どういう気持ちでボランティアに参加していて、こういうふうなことを頑張っているんだよねっていうふうに伝えることで、みんなが興味を持ってくれて、それならやってみてもいいかもしれないなっていう子が多かったのかなっていうふうに思っています。要するに、敷居が低いことをみんなに知ってもらうっていうことと、自分がどういう気持ちで参加しているのかっていうのを伝えることで、みんながボランティアに興味を持ってもらえるんじゃないかと思っています。

（深山）

ありがとうございます。現在、コロナ禍でボランティア活動がやりづらい状況があると思いますが、コロナ禍におけるボランティア活動の現状や、ボランティア活動を行うにあたりまして、工夫している内容とかありますか。鈴木さん、いかがですか。

（鈴木）

現状イベントは、中止となってしまいまして、今現在オンラインで活動している状態です。その中でも、フィリピンに何かできること、オンラインに変わって何かできることはないかと考えた時に、今実際に二つ行ったことを話したいと思います。一つは先ほどもお話しましたオンライン交流会でして、フィリピンの学生とSalamat“A”メンバーが、Zoomを繋

ぎまして、お互いの現状を報告し合ったり、あとは自己紹介等、今アイスブレイクをしたりと楽しみました。メンバーは、最初に申し上げましたが、英語を使うのか、という不安が最初出ましたが、皆さん結構積極的に話してまして、1時間という短い時間でしたが、結構いい濃密な時間になったのかなって思っております。もう一つは、オンライン演劇ですね。コロナ前はフィリピンに実際に行きまして、何か教訓のあるミュージカルを一つやっていましたが、この状況でフィリピンには行けず、その代わりにそのオンラインの方で何か、その変わることができないかということで、演劇をやってみることで、ちょっとミュージカルだったんすけど、人が集まるのは確かにやばいってことで、朗読劇には変わってしまったものの、タガログ語で演劇をしてみまして、それをインスタグラムやフェイスブック等に挙げたりしておりました。直近の話をいたしますと、今現在企画していますのが、フィリピンのフェアトレードアクセサリーですね。コロナ前に販売しておりまして、フィリピンのお母様方が実際に公平な値段で、アクセサリーを買い取りまして、日本で販売するという活動をしておりましたが、それをオンラインショッピングの方でやってみようという試みが今計画中です。以上です。

（深山）

ありがとうございます。藤本さん、いかがでしょうか。

（藤本）

きずなInternationalが発足したのが、東日本2011年の東日本大震災の津波の被害があった地域の支援団体として発足したんですけど、そこで10年間ですね、ボランティア活動を続けてきて現地の方々と、様々な役所の方だったり地元の方、地域の方、会社の方等、様々な方々と、今もう10年たった今でも連絡を取り合ったりしてるんですけど、現地に行けなくなってしまったので、要するに何もできない状態が続いてしまったので、一つ打開策として、現地の人にオンライン、メール等で何かできることなどはないかっていうふうに様々な方々に呼びかけてみました。ニーズを聞いていくつか活動に結びついたものもあって、その一つとしてはYES工房っていう、タコの文鎮を作ってる、南三陸はタコが有名なんですけど、タコの文鎮を作っている工房というか、企業がありまして、そこの担当者と私が連絡を取った時に、オクトパス君の宣伝をしてくれと、オクトパス君ていうのが、今ここにいるんですけど、これぬいぐるみなんですけど、文鎮がメインで売っている、商品でして、その文鎮を机に置くと試験をパスするっていう、願掛けも込めたオクトパス君を宣伝してくれっていうふうに、言われて大学の学園祭の時に、オクトパス君を全面にアピールして、

活動というか、現地のニーズにこたえるという形で、これも一つのボランティア活動なのかなと思ってやっていました。こっちでもできるっていうのは、多分きずなが南三陸に拠点に置いていたからっていう、ちょっと特別な理由もあると思うんですけど、それでもできることを探す上で関わっている人に、何か聞いてみる、聞き取りをするっていうのは非常に大事なのかなと、やっていて思いました。以上です。

（深山）

ありがとうございます。最後になりますが、言い足りなかったことや見ている方へのメッセージなどがあれば教えてください。

（榎本）

ボランティア活動は、人のためにやるわけではなくて、自分の経験にもありますので、積極的に参加していただけたらと思います。このフォーラムをきっかけに、ボランティア活動に少しでも、興味を持っていただければ嬉しいです。ありがとうございました。

（若田部）

このパネルディスカッションの中でいくつかお話もあったと思うんですけれど、このボランティアフォーラムが少しでもボランティア自身のハードルを下げるきっかけになれば嬉しいなと思っております。以上です。

（鈴木）

ボランティアって資格とかも必要なくて、そんなに肩の力を入れずにできると思うんですけど、自分のためっていうか、いろんな世界を知ることもできますので、ぜひ考えてみていかがでしょうか。ありがとうございました。

（山本）

運がよかったのか、私は今まで参加したボランティアで後悔したものがなくてですね、探してみると意外に、活動場所が見つかると思うので学生の皆さんは、ぜひ積極的にボランティアに参加してみてください。また、私が言うのもおかしい話かもしれないんですけど、なかなか一歩が出ない学生さんが結構多い気がしますので、地域の方々はぜひこう優しくお声をかけていただけると嬉しいです。本日ありがとうございました。

（藤本）

皆さんの話を聞いて、いろいろ学ぶことが多かったんですけど、ボランティアをやるきっかけとして、何か、ボランティアをやってる団体に所属すると、ボランティア活動に参加しやすいのかなっていうのは思いました。1人でやろうとすると、何から始めればいいかわ

からないんですけど、団体に所属することでボランティアに何となくだけど行ってみる。そこでボランティアってこういうものなんだっていうのを理解することによって、何かボランティアをより好きに、楽しく活動できるのではないかなと思いました。あと、オクトパス君、YES工房というサイトでたくさん売っているので、これを買うことによって被災地の貢献、金銭的に、お金を回すことによって、それも一つのボランティアの活動として使える使えるというか、一つの方法だと思うのでぜひ、ご購入お願いします。皆さんありがとうございました。

（小笠原）

ボランティアで、自分が楽しむことが一番大切だと思うので、いろいろやっていく上で悩むこととか考えないといけないこともたくさんあると思うんですけど、自分が楽しむことを一番大切にすれば、きっと、相手も、変に遠慮したりせずに、助けて欲しいっていうのを伝えてきてくれると思うので、この場にいる皆さんも、これを見ている皆さんも、自分が楽しむっていうこと忘れないでボランティアしていただけたらいいんじゃないかなっていうふうに、日頃思っています。以上です。

（山田）

ボランティア活動は気軽にできて、とても楽しいので、やってる方がいたらぜひ、地域のでも大学でも、ボランティア関係のグループ団体があると思いますので、ぜひ参加してみて欲しいと思います。以上です。

（深山）

はい。ありがとうございます。お時間となりましたので、最後に、上田氏からまとめをお願いします。

（上田）

本日はありがとうございました。実際に学生ボランティアとして、具体的な取り組みをお話伺って本当に頼もしいなというふうな気持ちになりました。ぜひ皆さんをきっかけとして、多くのボランティアに参加したことがないという人たちがたくさん参加するきっかけを作っていってくれたなというふうに思いました。最後、ボランティア活動なんでするんだというときに、一つはボランティア活動の特徴として、バリューの交換というバリューエクスチェンジという表現を聞いたことがあります。自分の時間や、労力だったりとか、行動、それによって、何を対価としてもらうのかっていう時に、それが金銭的な対価ではないものがたくさんあるというふうな、話だったと思います今日は。ぜひ、その自分自身

の行動のきっかけを、様々な形で交換がある。これがとても豊かな社会をつくると思いますので、ぜひ皆さん、自分自身が貢献できることと、どんなものが得られるという双方向の関係を、今後も考えていってもらえたら非常にいいかなと思いました。今日はありがとうございました。

（深山）

皆さんありがとうございます。それでは、これをもちましてパネルディスカッション及びせたがや学生ボランティアフォーラムを終了とさせていただきます。最後までご視聴いただきありがとうございました。